

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月28日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21500553

研究課題名（和文）

創造的身体表現活動による態度変容と異文化理解—文化に固有な舞踊運動の体感を通して

研究課題名（英文）

Attitude change represented in creative physical expression, and cross-cultural understanding

研究代表者

柴 真理子 (SHIBA MARIKO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：70144558

研究成果の概要（和文）：日韓の舞踊専攻生の同国人とのデュエット、及び異国人とのデュエット時の体感から、同国人とのデュエットには最初からみられる身体的引き込み現象、間主観的な世界の成立は、異国人とのデュエットでは、その活動を積み重ねることにより、相手の呼吸を感じ、安心感、信頼感、一体感が生まれ、次第に身体的引き込み現象が生じ、間主観的な世界が成立してくることが明らかになった。ここに、創造的表現活動による異文化間の相互理解の一つの様相を捉えることができた。

研究成果の概要（英文）：

We conducted the Japan-South Korea comparative experiments about the bodily sensation of dancing with a compatriot, or with a foreigner.

We conducted comparative experiments with Japanese and Korean students as subjects, about the physical experience of dancing with a person from their same country, and then with a foreigner.

As a result, we found that entrainment and the inter-subjective world were formed from the very beginning of dancing with a compatriot.

In contrast, in a duet with foreigners, by repeated activity, the partner's breathing was felt, and a sense of security, confidence, and unity were developed, and that physical entrainment was gradually formed, and the inter-subjective world came into being.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学，身体教育学

キーワード：舞踊教育，体感，異文化理解，

1. 研究開始当初の背景

異文化における舞踊の研究においては、これまで民族舞踊や舞踊作品そのものを対象とした現象面や形態面からのアプローチが主であり、本国と他国の舞踊運動を共に踊ることによりもたらされる踊り手や観察者の内面に着目した異文化理解の観点からの学術的研究は行われていない。

また、舞踊運動の内的経験に伴う体感による感情価に関する心理学的・舞踊教育学的研究は、国内外において柴を代表とする舞踊学研究グループを中心に進められているのみである。このように本研究に関連する先行研究はきわめて少ないが、筆者が中国とノルウェーで行った体感評価実験から、国際化の時代に、同じ場に身体をおいての創造的身体表現の活動が、身体を通しての異文化理解の一翼を担うという仮説が導出されている。本仮説の実証は、現代のグローバル化・情報化の著しい進展において、自己理解・受容や他者理解の困難性など、人間が本来的に自然に持つ感情や他者への共感性からの疎外が指摘される中で、舞踊運動がもたらす原初的な感性コミュニケーションと体感の関係性を心理学的・人間工学的に明らかにすることへの貢献が期待されるとともに、言語外の異文化コミュニケーションの在り方を探求する上で、意義のある先駆的な試みであると言える。

文化圏により言語は異なり、その言語理解はバーバル（理性的）・コミュニケーションのために必須であることは自明である。一方、ノンバーバル（感性的）の側面では、同じ舞踊運動（身体表現）を見る、あるいは、踊る行為において、その印象や体感が異文化圏で認知的に異なることを実証した研究は一部で

行われているが、そこから文化圏の異なる人々との間において、どのような身体表現活動を行うことがより豊かなコミュニケーションに繋がるのかという問題については未だ、学術的・客観的な解明が行われていない。

本研究は、これまでの筆者の一連の研究の延長線上で生じてきた課題に、国際的な視野に立って取り組むものであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「日本及び韓国という東アジア文化圏に位置づけられ、共通性は高いものの、異なる点も含む文化圏を対象に、それぞれの文化が有する固有な動きを基盤に、各文化の担い手である舞踊家が作成した創造的身体表現（舞踊運動）を実験材料として

以下のみえと体感による実験を実施し、

- (1) それらの舞踊運動のみえによる感情価が両国の舞踊専攻学生で共通なのか、異なるのか
- (2) それらの舞踊運動を両国の舞踊専攻学生が単独で、あるいは、同じ国の人と、または、他国の人と共に踊る（デュエット）際の体感の評価を通じて、同じ場に身体を置いての創造的身体表現活動が個々人の態度変容に及ぼす影響と異文化間の相互理解に果たす役割についてを考察することであった。

3. 研究の方法

- (1) 日本及び韓国の舞踊における基本感情を表す舞踊運動の作成

柴ら日本の舞踊学研究グループが作成した舞踊における基本感情を表す6つの舞踊運動と同様に、韓国の舞踊研究者が、韓国文

化圏に固有な動きを基盤に同様の6つの舞踊運動を作成し、それらを韓国の舞踊家に踊ることを求め、ビデオに収録した。

(2) 日本及び韓国の学生による舞踊運動のみえと体感による評価実験

韓国芸術総合学校舞踊学部OG 5名をお茶大に迎え、(1)で作成した12の舞踊運動について、みえと体感による舞踊運動の評価実験を実施。また、別の日にお茶の水女子大学舞踊教育学コースの学生25名を被験者として同様の実験を実施した。

(3) 同国人、および異国人とのデュエット時の体感評価実験2010

日韓の舞踊研究者・舞踊専攻生が一堂に会して2010年12月に国立韓国芸術総合学校

(ソウル)で実施した。被験者はお茶の水女子大学舞踊教育学コースと韓国芸術総合学校舞踊院創作科に在籍する学生5名ずつであり、被験者は予め決められた同国人同士の二人組と、異国人との二人組で、①課題の動きを二人で踊る、②各自、課題の動きを發展させて一まとまりの動きを創る、③二人組になり各自が創った動きを教えあい、二人で踊る④二人での即興(テーマ『対話』)という4つの課題を行った。被験者には、各課題の実践後に、活動中の体感の振り返りを自由に記述することを求めた。

(4) 同国人、および異国人とのデュエット時の体感評価実験 2011

お茶の水女子大学舞踊教育学コース第39回創作舞踊公演にゲストとして出演する韓国芸術総合学校舞踊院創作科の2名の学生とお茶大の舞踊専攻学生各2名を被験者に東京(お茶大及び北沢タウンホール)で以下の実験を実施、被験者には前年同様、活動中の体感の振り返りを自由に記述することを求めた。①実験材料(日本人作成の『楽しい』)の動きを覚えて二人で

踊る ②ピアノ曲演奏での二人での即興 ③テーマ「分かち合う喜び」での二人での即興 ④ピアノ曲での即興から作品へ ⑤お茶の水女子大学舞踊教育学コースの卒業公演での体感

4. 研究成果

本研究期間中に延坪島砲撃事件と東日本大震災があり、研究計画を大幅に変更することとなったが、そのような状況の中でも、両国の学生が一同に介しての実験が実施できたことはありがたいことであった。2国の研究者と被験者である学生が同じ場に集い、そこで共に創り踊ることをベースとする本研究は、遠隔の地に住む生身の人間が時間・空間を共有する環境づくりが容易なことではなかったが、実際に時間・空間を共有して、刻々と変化する状況での舞踊活動は、実験の場としてのみならず、この研究に関わるすべての人々にとって舞踊を通しての異国人とのかかわり、またそのことの意味を感受し考える貴重な経験となった。

このような貴重な経験からえられた研究成果は以下のようにまとめられる。

(1) 日韓の舞踊研究者が作成した舞踊の基本感情を表す舞踊運動を実験材料としたみえと体感による感情価に関する実験調査から、舞踊運動の作成者と被験者が同じ文化に属する場合とそうでない場合で得られる感情価に、異文化の影響はほとんどみられなかった。

しかし、みえと体感による感情価を比較すると、みえによる感情価では日韓で相違がみられた舞踊運動を実際に踊ると、踊ることにより得た感情価(体感による感情価)は、日韓で類似した感情価が得られ、このことから受動的に舞踊運動をみる(視覚)よりも実際

に踊ること（体性感覚⁴⁾）によってその舞踊運動のもつ特性を共有できるということが推察され、これは興味深い今後の課題である。

(2) 創造的身体表現活動による態度変容と異文化理解について、既知の同国人との踊りでは最初から身体的引き込み現象が起こり、間主観的な世界が成立しているのに対し、未知の異国人と踊りでは初めは文化が異なり言葉も通じない相手にとまどい、相手の様子をうかがい、動きを合わせることに終始している。しかし、実験が進むにつれて、相手の呼吸を感じ、安心感、信頼感、一体感が生まれ、意思疎通ができるようになる、即ち、同じ異国人との活動を積み重ねることにより、次第に身体的引き込み現象が生じ、間主観的な世界が成立してくる。

そして、被験者は異国人に呼吸で動きを教え、呼吸で共に踊ることによって、ノンバーバル・コミュニケーションである舞踊の特質を再認識し、そのことが同国人同士のデュエットにも新鮮さをもたらしている。実験が進むにつれて文化の異なる者同士の距離が縮まり、呼吸をはじめ様々な体感を共有し、わずか一日の舞踊活動の中で、初めにあった同国人で踊ることに対する体感と異国人と踊ることに対する体感の相違は次第になくなり、共にわかりあう間主観的世界が成立してきている。

ここに、創造的表現活動による異文化間の相互理解の一つの様相を捉えることができた。

(3) 本研究の考察は、被験者自身の動きの体感に基づいているが、被験者の体感の変容はその体感が生まれたその時々の被験者の動きの変容とどのような関係にあるのかを舞踊研究者2名で動きの分析の観点を定めて分析を行った。まず、決められた舞踊運動

を二人で踊る際の評価の観点は、①個人について…課題の動きがもつリズムで踊れているか否か ②二人の関係について…対のリズムで踊れているかいなかとした。対のリズムとは、一緒に踊る人同士が、二人の動きを外側から合わせようとするのではなく、二人の動きが自然にあっている共鳴のリズムを指す。

この観点にのっとっての評価の結果、実験の最初と最後に異国人と踊った課題1の動きについて、4組とも最初は各自、動きにメリハリがありリズムはとれているが、二人の動きを外側から合わせようとして、お互いのリズムが共鳴して動く対のリズムになっていない。これに対し、最後には、動きが滑らかになり、二人の動きが内側から自然にあって、対のリズムで踊ることができていると認められた。

そして、「二人で感じあって踊る」については、二人の動きがタイミングのよい能動—受動関係にあるか、即ち、各人の動きの間が合わさって一つの間（全体の流れ）となっているかを評価の観点とした。その結果、同国人同士のデュエットでは1回目が、異国とのデュエットでは2回目が、二人の動きがタイミングのよい能動—受動関係にある、即ち、二人の間が合わさった一つの間が共創される傾向がみられた。

(4) 体感と動きの評価の関係について、外側からの評価である動きの評価と、被験者の体感とがどのような関係にあるかをみるために、評価と被験者の各デュエット毎の体感記述を照合した。

その結果①二人の体感がプラスで一致し

ていれば、外側からも「二人の動きがタイミングのよい能動—受動関係にある」と認められ、②二人の体感にズレがある（一人は+の体感、一人は-の体感）場合、及び、-の体感が一致している場合には、外側から「二人の動きがタイミングのよい能動—受動関係にある」と認められない。即ち、体感と動きの関係について、二人で既製の動きを踊る、或いは相手を感じながら即興的に踊る場合、二人の体感が+で一致している場合、二人の動きのリズムは共鳴し、対のリズムで踊れている、また、二人の動きの間が合わさって一つの間（全体の流れ）が共創されているという関係にあると考察された。

以上のことから、共に踊ること（今回の場合はデュエット）による間主観的な世界の成立には、「対のリズム」「二人の間が合わさっての一つの間の共創」が不可欠であり、それには、呼吸が合うということが基底にあるということが考察された。そしてその呼吸が合うという現象は、今回は既知の同国人でのデュエットにおいては初めから出現していたのに対し、未知の異国人とのデュエットでは活動を重ねるにつれて次第に呼吸があってくるという違いがみられた。このように共に踊ることにより、異文化を背景にもつ踊り手同士も短期間のうちに感主観的な世界が成立する傾向にあることが認められた。

しかし、今回の被験者が初めに感じた相違は相手が未知の異国人であったからなのか、そうではなくて同国人あっても初対面の相手であれば、未知の異国人を相手とする場合と同じような体感の相違として現れるのかを検討することが課題として残された。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①柴真理子、南貞鍋、猪崎弥生、李世珍、小堀結香、高田装子、中川由香子「舞踊行動の体感に関する日韓比較」表現文化研究 査読有、第10巻第2 2010年度 pp. 235-245. 2011. 3

[学会発表] (計1件)

①柴真理子・坪倉紀代子「日韓の舞踊専攻生によるデュエット時の動きと体感の変容」第63回舞踊学会 2011. 12. 3 彩の国さいたま芸術劇場

[その他]

ホームページ等

<http://www.li.ocha.ac.jp/geijutsu/buyou/shiba/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柴 真理子 (SHIBA MARIKO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：70144558

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し